

翔てゆく少女

村上 馨

1

「名前はゆきこって言うの。こう書くの」と言っ
て娘はぼくの左手をとると、その手の平に華奢な指
先でゆっくりと揺・季・子とつづつてみせた。

「変わってるでしょう」娘はぼくの顔を覗き込み、
確認するように言った。そのとき、笑顔が愛くる
しく輝いて、どこか幼さを残したその顔に女性の過
渡的な魅力がどっと溢れた。年の頃は、まだ十七、
八にもいたらぬと思われた。

ときおり六月のなまあたかい風が、宵の静けさに誘
われるようにふうっとどこからか迷い出てきては、
ぼくと娘の頬をそつとやわらかな刷毛が撫でていく
ようにかすめていくのだった。すると、娘の生気に満
ちた艶のある長い髪は、急にほつれて風にゆあみするの

だった。

澄みきった上空には、星が降るようになり
ばめられていて、あらゆるものがこの上なく
すばらしく、神秘的にさえ思われてくる夜だ
った。誰でもよい、そんな夜におのれの存在
を感じてみるがよい。とたんに、それはもう
人生の向こう側だ。
こんなふうで、ぼくがゆきこというその女
性と出会ったのは、あたりがもうすっかり初
夏の香をただよわせはじめていた札幌の、六
月も終わりに近い日のことだった。その日、
ぼくは空路北海道へ入った。旭川に私大が新
設されたが、その特別高圧電線が近隣の密
集住宅地のテレビ受像機に、どういう訳だか
電波障害を誘発するらしい。前日、その私大
からぼくのいる東京の本社に電話が入ってき
た。NHKと協力して原因を調査した後、し
かるべく対策を講じてくれ、との一方的なも
のだった。金はいくらかかってもよい、ただ
し、くれぐれも住民感情を害することのない

ように慎重を期してもらいたい、云々と、電話口の相手はこのいつの頃からか流行しはじめた『住民感情』というわかったようなわからないような言葉をやたら繰り返し強調してきた。千歳で降りて札幌まではバスに揺られた。車窓からは、昼下がりの陽ざしがやわらかく射し込んできて、ほくはついうとうとしてしまったようだ。隣の客に凭れかかつてはその度に目を覚ました。

「よくおやすみになったようですね」バスが着いて、席をたつとき、その客は笑いながらそう言った。降りると先ず営業所へ立ち寄り、その足ですぐ札幌放送局の門をくぐった。まっすぐ受付へ向かおうとしたが、入口でちやうどこれから外出しようとする女性にすれちがった。それがゆきこだった。

「こちらの方ですか？」とぼくの方から声をかけた。

「ええ、そうですけど・・・」

「じゃあ、営業技術課へは、どう行けばい

いんですか？」

「それなら二階です。階段を上がって右手の三番目の部屋がそうです。表札がかかってますからすぐわかると思いますよ。そこにエレベーターがありますけど、階段を使われた方がわかりやすいと思いますわ」

「すみません。どうもありがとうございます」とそれだけ言い交わすと、ぼくたちは互いの目的に向かって歩き出した。ゆきこは善良な人が何の勝手もわからない未知の来客にみせる、あの親身な情のこもった愛想のいい笑みを浮かべてぼくとすれちがった。そのことに、たいして意味はなかったのだが、おそらくゆきこは誰に対しても同じような態度をとるのだろうが、そのとき、ぼくはそれだけのことで自分の身が知らず軽くなっていくのを覚えた。そして、あたりにすがすがしい涼気が漲ってきはじめたように思えた。

それは、あたりにちょうど黄昏が降りてきて、街路樹は宵のとばりにその身を沈めようとする時刻だった。あるかなきかの弱い西陽が、通りに木立の影を長く引き伸ばしていた。この昼と夜が目に見えて入れ替わる時刻にはものみなすべてに臨界点でのあの微妙な不均衡があった。が、それもつかのまのことので、やがてすべてが時間の流れに沿って、休息へと向かいつつあった。そして、一日の仕事で蓄えられた疲労は静かにその中へと吸い取られていくようだった。ぼくはひどく抽象的な気分になっていた。「わかりました。ちょうど明後日電測車があいていますから、それでいっしょに旭川までまいりましょう。とにかく、データをとってみたいことには、お宅の方も対策の打ちようがないでしょう」と、ぼくが訪ねて行ったそのまだ若い係員は、ことさらに専門分野での力量のほどをひけらかすよ

うに言った。『どうやら、仕事上のイニシアチブは、いっさい奴サンに委ねておいた方が利口なようだ』と、ぼくは思った。玄関を出るとき、入ったときすれちがった女性の笑顔がちらっと頭の隅を掠めた。

ぼくは宿への道をゆっくりと歩いていた。するとそのとき、通りに面した路地を足早に飛び出してきた一人の女性の姿がぼくの目に飛び込んだ。女性は、通りを小走りに駆けて横断すると、ぼくと同じ側の舗道をぼくに向かう格好で、今度はゆっくりと歩きはじめてきた。彼女は遠くからでもそれとわかるほど明るい目の覚めるようなスカイ・ブルーの帽子をかぶっていた。この色彩的な、やけにこの場にそぐわない印象に、ぼくは奇妙な気分になった。わけもなく胸が騒いだ。

『何かが起こるぞ・・・』すると、ぼくは急に落ち着きをなくしてしまった。ぼくは取ってつけたように、ぎこちない所作で、ポケットへ手を突っ込んだ。それから今度は煙草

を取り出して、立ち止まって火をつけた。それからまた歩きはじめた。彼女は散歩の途中ででもあるらしく、その歩みは目的を持たない人のそれだった。後ろ手を組み、あたりの雰囲気を楽しむといった趣でぼくの方に近づいてくる。好奇心が臆病に打ち勝って、ぼくはすれちがうまで彼女から目を離そうとはしなかった。彼女の方は、いっかなぼく存在を気に留めるふうがなかった。ほんの一メートルほどに、彼女とぼくとの距離が縮まったとき、やっと、それもつかの間のことだった。が、それまでじっと彼女に据えられたままのぼくの視線に彼女のそれが応じたのだった。それは後年になっても、なおぼくが忘れることができなかったほど、たしかな瞬間と呼べるものではあった。ぼくは思わず声が出そうになって喉元までこみ上げていた言葉・・・何を言おうとしていたのか、今もってわからないのだが・・・を、あわてて呑み込まなければならなかった。その混乱をゆきこが救っ

てくれた。

「あら、さきほどの・・・。今お帰り？」
それがはじまりだった。

3

娘はちょこんとぼくの横に腰かけている。
今知り合ったばかりだというのに、娘はまるで
ぼくとはずいぶん前からの知己でもある
かのように、屈託なく話しかけてくるのだっ
た。警戒心すら持たないようだった。それは、
裏を返せば、ほくという人間の存在などまる
で意に介していないふうでもあった。それが
またぼくには心地よく思われた。ぼくは久し
く忘れていた、幸福なと言っている不思議な
気分になりかけていた。女性とともにいて、
こんなに気が楽なこともめずらしかった。正
直言えば、彼女の話すことは、ほとんど脈絡
も取り留めもない俗っぽい話ばかりで、ぼく
にとっては取るに足りぬことばかりだった。

『それなのに、どうしてこうも可愛いのだ』
ぼくはそんな彼女をさも不思議な面持ちでじ
っと観照するのだった。

おやっと思は思う。話の合間合間に、娘
はよく意味のない笑みを浮かべるのだったが
ぼくにはそれがどことなく自嘲的で、憂いす
ら含んでいるように見えてくる。それともそ
れは、ぼくがこの異境の地で、この見知らぬ
不思議な少女に、そのような内面的イメージ
を与えたかっただけのことなのかもしれない。
。

『あっそうそう』とか、『まあ』とかいつ
た具合に、衝動的な感情がそのままことばと
なって口からこぼれ出たときなど、彼女は特
に素晴らしい表情を、顔や体全体に持ってい
たが、そのようなとき、ぼくは彼女が瞬時完
全なまでに意志を喪失しているのではないか
とさえ思った。話をしていないときは、妙に
黙りこくって、うつむきがちの眼差しに焦点
を定めず、指先をもてあそんでいたが、その
ようなときの彼女は、俄に抽象的な色彩を帯

びてくるのだった。ぼくには、彼女が口には
出せないさびしさで包まれていて、今彼女は
透明な思考の空白状態にあるのだと思われる
くるのだった。すると、急に彼女がひどく愛
おしく思われてきて、以前から、ぼくはこの
娘を誰にも知られず、ひそかに愛しつづけて
いたんだというような途方もない空想に囚わ
れるのだった。

彼女はぼくを行き付けのレストランに連れ
て行った。その店は大通公園の西はずれの薄
暗い路地をほんのわずかだけ入ったところに
あった。通りからはちょっと目につきにくか
った。レンガ造りのこぢんまりとした建物の
二階がステーキ・レストランになっていた。
内部は北欧風の調度と造りで統一された洒落
た感じのする店だった。彼女はよくこの店に
くるらしく、入るなりエプロン姿で立ち回っ
ていた店のマダムとおぼしい女性に「こんば
んは。あいてる？」と、親しみと馴れ合いの
こもった明るい声を送った。

「あら、ゆきちゃん。今日はまたすてきなひととごいっしょじゃない。どなた？」

マダムはぼくの方をちらっと見やりながら彼女に聞いた。

「お仕事のことでちょっとね。東京からみえてるの」

ぼくたちは窓寄りの席に陣取った。そこなら夜景がよく見えるし、目の遣り場にこまったときや話題に窮したときそいつを利用することができ。昔よくやった手だった。しゃべるのにひどく努力が要るようになる、知らず黙りがちになる。ただその場を取り繕うためにだけ外を眺めている。もちろん何も見てはなんかない。心は余所へ飛んでいる。もう一刻も早く帰りたいと思っている。だがそんなことがまともに口に出せる訳はない。そこでなんとかあたりさわりない口実を考え出して別れることになる。また電話するよとかなんとか言って、愛想よく。もちろんぼくはこの相手を嫌っていないし、また会いたい

とさえ思っている。ただ、それもこれも失う怖さからくるものでしかなかったが・・・。
ゆきこは過去のどんな女性ともちがって見えたと。我にもなく心が弾んでいるのがよくわかった。そこでこんなことは口にすべきではなかったと思っただけが言ってしまった。

「まさかあなたとこんなことになるうとは思わなかった」

「あら、あなたがのぞんだんじゃなくって。ところであなた、あそこへは何しにいらっしやっただの？」

そこでぼくは、自分が札幌へきたいきさつと、これから為さなければならぬ仕事の概要を彼女に語った。それがいかに困難な仕事であるかということや、自分の能力をかなり誇張して。しかしその割には思ったほどの効率はなかった。

「ふうーん、大変ね」

それだけだった。彼女は自分のことをあまり語りたがらなかった。放送用の原稿を整理

しているただけ教えてくれた。

「わたし刑事さんが詰問するような調子であれこれとしつこく質問されるの嫌いなもの。まるで見合の席で身元調査でもされてるみたい。そんなじゃ、ちっとも小説的部分に触れることできないもの。それにそんなこと、どっちだっていいじゃない」

そこで話は、自然と世間日常の俗話へと落ちていくのだった。

土曜の夜はどこにも活気が漲っていた。街並みにも、路上にも、そここのレストランや喫茶店のテーブルの上にもそれは乗り移っていた。人々はそう簡単には家へ帰りそうもなかった。平日の朝夕、通勤電車に揺られながら、きまって誰もが見せているあの殺風景な顔もさしずめ今夜はどこかへ置き忘れてきたような案配だった。ゆきこはたとえば、相変わらず屈託がなさそうに、グラス片手に今度は十勝ワインの講義をひとくさり弁じはじめた。そんな彼女を見てみると、ほくは彼女

が目の前の具象物から、それが自分の中で連鎖的に結びつく知識の一片でもあれば、すぐさまそれを取り出してきては、何の手も装飾も加えず放出するといった印象を抱いた。まるで彼女の底が手に取るように見えたという気さえした。燭台に立てられた蝋燭の明かりが彼女の顔立ちに淡い陰影をつけていた。炎がそこはかとなく揺れるたびにぼくは幻惑され、息苦しささえ覚えた。多分ぼくは変な目で彼女を見つめていたのだろう。ゆきこは急に嫌な顔をした。そして席をはずした。

椅子の上に無造作に投げ出されたハンドバックの口から文庫本の端がのぞいていた。おそらくハンケチでも取り出した弾みにそうなったものだろう。彼女は足早に化粧室へ入っていった。興味ある他人がたった一人の世界でどんな本を読んでいるのか、それを知ることは心の中を覗き込めたほどの意味がある。ぼくはこっさりその本を取り出して見た。ヴェルレーヌ詩集だった。ぼくはおもはゆい気

がした。甘く、苦い思いが頭の中を走った。
いつとき、ぼくはこいつに夢中になっていた
のだ。この『無言の恋歌』の一節など讀んじ
ていたほどだ。それも恋人たちに宛てる手紙
の末尾にそれを付け加えるために。

そはやるせなさの絶頂なり
そは恋痴れし疲れなり
そは微風に抱かれて
おののく森の姿なり
そは朧めく梢なる
小さき声の唱歌なり。

ああかそけくも爽やけき
風の響きやささやきや！
そは鳥のごとささ鳴きし、
そは虫のごと忍び泣く
そは風渡る小野の草
やさしく叫ぶと似たるかな・・。
君は言うらん、またそれは

流るる水の水底の、
石の音なき揺ぎよと。

ねむれるごとき野の果てに

かくももだゆる魂は

われらがそれにあらざるや？

この静かなる黄昏に、低き声して

つつましき祈りのごとく囁くは

わが、はた君が、こころならずや？

見ると、ゆきこは電話をかけていた。声は

遠くて聞き取れなかった。本をもとに戻すと、

帰ってきた彼女に、ぼくはさも軽い感じで訊

ねる。

「どこへかけてたの、うち？」

「ううん、お友達のところ。ねえ、それより

明日はお休みでしょう。どこか連れてってく

れない。そうね、どこがいいかしら、・・・

そうだわ小樽がいいわ。小樽の海岸へ行きま

しょうよ。きつとかもめの群が飛んできてるはずだわ」

そのとき、マダムがぼくたちのテーブルに近づいてきた。

「そうそう、ゆきちゃん、言い忘れてたけどね、今度檜山文枝がくるわよ」

「えっいつ？それで何演るの？」ゆきこは瞳を輝かせ、身を乗り出した。

「来月の十九日よ。あなたの大好きな『二ナ』を演るわよ。大丈夫、安心なさい。ちやんと二枚とってあるわよ」

「でも彼帰るかどうかわからないわ。出て行ってから何の連絡もないのよ。落ち着いたら必ず連絡するって言ってたんだ。・・・」

「そうなの・・・。出かけるときけんかでもしたんじゃないの、どうせあんなのことだから。あら、お客さんだわ。ごめんなさいおじやまして」と最後の言葉だけをぼくに向けると、マダムは軽く会釈して奥へ消えた。

「さっきの話聞いていたでしょう」
外へ出ると、ゆきこが聞いた。夜がすっか
り更けていた。初夏でも風は冷たかった。街
路樹がかさこそと音を立てながら、頭上で身
を揺すっていた。それらが醸す数知れないざ
わめきが妖しげな声音となつて下り立ってき
た。ぼくは肌寒く感じた。それはあまりの寒
さに思わず身を固く引き締めなければそれに
耐えることができないというていのものでは
なかった。そういうときには、ほのかな温も
りが欲しくなる。それも寄り添う肩先から伝
わってくるような人間的ぬくもりが・・。
ゆきこの問いかけには、ぼくは気のなさそ
うに、「ああ」とだけ返事した。かなり曖昧
な素振りを匂わせて。それにぼくは、「聞く
には聞いていたが、それは声が聞こえてきた
から耳に入れた程度に過ぎないので、話の内
容についてはさして興味もないので何も理解

していない』というふうの言外の意味をこめ
たつもりだった。その実、身を耳にしていた
のだが。それをゆきこがどう受け取ったかは
わからない。

「少し疲れたわ、かけましようか」と言っ
てゆきこはぼくを脇のベンチに促した。公園
の噴水が一人放物線を描き、それにあらゆる
角度からネオン・サインのきらびやかな原色
が映えていた。人通りもまばらになった。こ
こにも都会の孤独があった。もはや酒と無縁
の人間など、この界限からたった一人だって
見つけ出すことは困難な仕業にちがいない。
向こうから三人の男が肩を組み合って、も
つれる足を引きずるようにしてやってくる。
彼らの交わす傍若無人な会話が、今はすっか
り明かりの落ちたオフィスピルのコンクリー
トにこだまし、それが一つの嬌声となり夜の
静けさの中へ撒き散らされていく。
「ばっかだなあ、おまえは。ほんとにあい
つにそんなこと言ったんかあ」

「頭へきたからついがまんできなくなっちゃってなあ。いつかはやらかすと思っていたのよ。きっかけだけが問題だったのさ」

「ありやあ、ああ見えてもプライドだけは人一倍高いからなあ」

「辞めちまいたくなるぜ」

「よせよせ、どこへ行ったって同じことなんだから」

「おい、あのこなかなか可愛いじゃんか」

「女は純情そうに見えたってわかりやしな

いからな」

「おい、そんなにじろじろ見てやんなよ。

お楽しみ中なんだから」

「さて、おれはもう帰るぜ。せっかくあいつが股ひらいておれを待ってるというのに」

三人はいつせいに声高らかに「あっはっはっは」

と笑うと、今度は流行歌を一小節ごとにゆっくりと区切りながら、呂律の回らない舌で歌いはじめた。歌声はしだいに間遠になり、彼らの姿が見えなくなっても尚しばらく

残っていたがやがて聞こえなくなった。

その間もゆきこは話しつづけていた。ゆきこには両親がなかった。二人とも脳溢血だった。父は中風で長いこと床に臥せった後亡くなり、まもなく母がこれを追うようにして同じ病で仆れた。―いつもけんかばかりしている二人だったわ。それも本気のやつをね。なぜかそんな記憶しか残っていないの―と言った。十歳のとき母の姉の家へ引き取られ、以後その家で育った。伯母さんには息子が一人あったが、夫には先立たれ保険のセールスをして生計を立てていた。従兄の友達がよく家に入りししていた。

それがゆきこの言う『彼』だった。彼はいつもまるで自分の家にいるように振る舞った。彼が来ると家中が冗談と笑いで包まれた。ぼくにはその団欒がどんなであつたか理解できないような気がした。彼女がその中にいるというだけでそれが花であり、その場を花の匂いで染めていたのにちがいない。―彼だったらい

つもわたしをからかうことしかなかった。
もちろんわたしも負けじとやり返してばかり
いたけど・・・。従兄も含めて男の人たちが
ただわたしを見ているだけで、さらにわたし
のそばでわたしといっしょにいることに喜び
を感じているんだと感ずることがわたしのほ
んとうの幸せの時期だった。わたしは自分に
魅力があり、可愛さがある人たちに喜びを与
えているのだと考えたり、それを意識するよ
うなことはなかったが、わたしはそれを知っ
ていたような気がする。わたしはあの人たち
の前では何をしてても許されているような気が
していた」と、そんなふうなことをゆきこは
語った。

それから、彼との関係について触れた。
「そんなだから、わたしたち二人だけでどこ
かへ出かけるなんてことはたえてなかったの。
彼も誘わなかったし、わたしもそんなのはボ
ーイフレンドだけでたくさんだったわ。それ
にそんなふうにあらたまったりしちゃうわたし

たちだめだったと思うわ。相変わらず見かけは、彼は従兄の友達であり、ただそのために家へ出入りするとうふうの関係がずつつづいたわ。そのうち彼も大学を終えて東京に行くことになり、その最後の公演（というの
は彼、演劇部に入ってたの）に来てくれと言った。帰り道彼とはじめて二人だけで歩くことができたの。彼は今日の芝居の出来はどうだったかとか、あれこれわたしに聞いたりしてとてもにこにこ話しかけながら歩いてたわ。
家が近づいて来ると彼、『いよいよお別れだなあ』ってしみじみ言ったの。そこでわたし言ったの。いっしょについて行っちゃいけないのって。そしたら彼一瞬とても驚いた様子を見せたわ。でも次の瞬間にはもう質の悪い冗談で人をからかうもんじゃないって笑い流そうとするの。冗談なんかじゃない、わたし真剣よ！って彼に食ってかかったの。わたし彼を睨みつけてやったわ。そのときはじめてわたしたち真剣な目と目でお互いの目の中を

読みとろうとしたみたい。実を言うとなんたし彼がわたしのことを気紛れで軽はずみな女だと思つて、わたしの無分別な決心を子供を諭すように説教くさい調子で拒絶するのではないかと恐れていたの。ところが彼ったら黙り込んで、一言も口を開こうとしないじやないの。わたし彼がつぎになんて言うかとか気が気じゃなかった。何かとりとめもないことでも言つてその場の空気を緩和しようにもそれをさせない冷たさがあるの。そんな重苦しい沈黙だった。それがわたしの家の路地に入るまでずっとつづいたの。家はもう目の前だしわたしたちもうあとがなかったわ。とうとう彼が口を切つたの。『じゃあ、元気で』つて。わたし何かが崩れ落ちた気がした。『いやっ、いやっ、このままじゃわたし今夜は別れられないわ』そう自分でも訳がわからず口走ってしまったの。彼わたしの方は見ないで地面に向かつてこう言つた。『待つてくれ。一年だけでいい。今はだめなんだ。必ず

きみを迎えにくるよ。約束する。お願いだからぼくを信じて待っていてくれ』って」

「どうやらゆきこは泣きはじめたらしかった。

前屈みになって、顔を両手でふさいでいる。

いつの間にやらとんだ役目を引き受けていた。

「それ以来ずっと梨のつぶてなの。それが

先週のことだったかしら、やっと手紙がきた

の。それも無造作な感じで・・・帰るから会

いたい。会っているいろいろ話しがしたい・・・

ですって。わたしに義理立てでもするつもり

なのかしら。手紙だともうとくに帰っている

はずなのにねえ。人間の口約束なんてあて

にはならないわね。その場かぎりの興奮でつ

い心にもない愛まで誓ってしまうんだから」

そこでぼくはゆきこにもこう言いたかった。

『きみだっておなじようなことが言えるんじゃない

かい』と。だがぼくもそれを言わなかった。

た。

「実を言うとな、わたしったら今日もさつきあなたと会う前にあそこであてもないのに

彼を待ってたの。それでもひょっこり会える
かもしれないってね。でも、もうなんだか馬
鹿らしくなってきた。これでもわたし
疲れちゃったのよ。・・」
ほんとに疲れたとでもいうように、ゆきこ
は深いため息をひとつついた。涙はもう乾い
ていた。

「どうしてそう急ぐんだい。何もたったそ
れだけでそう性急な結論を出すことはないじ
やないか。第一それじゃ彼の方がかわいそう
だよ。何かの事情ってこともあるだろう」

そうは言ったものの正直言えばぼくは彼が
ゆきこに会わなければいいとのぞんでいた。
そう思うと明日にもひょっこり彼が現れてき
そうに思われてきた。そうなればゆきことの
仮初めの出会いも費えることになる。

「あなたって思いやりのある方なのね。わ
たしみたいな女の言うことでも、ほんとうに
真面目に聞いてくれるのね。明日もお会いで
きるのね。じゃあ、朝の十時にやはりこの場

所でということに。小樽までなら電車で十分もあれば行けるわ。今夜はこれでさよならね」

「あっ、だいじょうぶ。一人でちゃんと帰れますから送らないでください」

そう言っただけで彼女は立ち上がった。ぼくも立った。雨が落ちてきはじめた。

「急ぎましょう」と言っただけでゆきこは小走りにかけはじめた。感傷的になり、興奮していたぼくは、つい図に乗り・・・ああそうだ。ひとつ言い忘れたことがある・・・とゆきこを呼び止めた。

「なあに」と澄んだ声が夜の中から響き返した。その距離感がぼくにこんなことを言わせた。

「きみは、きっとすばらしい女優になれるよ」

一語一語はつきり区切って、ぼくは大きな声でそう言った。慎ましかな微笑が、恥じらうように彼女の顔に浮かんだようだった。

「じゃあ明日。また明日。きっとね」
ゆきこはくるりと踵を返すと、夜の中へ駈
け込んで行った。ぼくは宿への道をゆっくり
と引き返した。

5

宿に着き、部屋に上がるといきなりぼくは
着替えもせずに、畳の上に仰向けに身を投げ
出した。興奮の余韻がまだ体内を駆け巡って
いた。その温もりを感じながら、ぼくはなお
しばらくの間じっとしたまま、ぼんやりと目
は天井の一点に見据え放心していた。
ぼくは架空のゆきこを思い浮かべている。
彼女は今二ーナを演じている。その傍らには
彼女の舞台稽古に立ち会って『かもめ』を演
出しているぼくがいる。ぼくは彼女にあれこ
れとアドバイスを与えたり、注文をつけたり
している。彼女はぼくの言う一言一言を熱心
に聞き取り、いちいちぼくに了解したという

ふうに頷いて見せる。そして彼女はまた新たな芸に意欲的に取り組むのだった。

階段を昇る人の気配がしたので、ぼくは空想を断ち切った。お内儀だった。帰りがけに帳場に立ち寄ったとき、ビールを頼んだこともぼくは忘れていた。

「おや、今日は何かいいことでもあったんですか。やけに浮かれていらっしゃるじゃありませんの」とお内儀はぼくをからかって見せた。

「おかみさんもひとつグラスを持ってきてぼくと幸福を分かち合ってくださいよ」と、ぼくがついお内儀の調子につられて言っしまうと、すぐさま人のいいお内儀は「それじゃひとつあなたの素敵なロマンス談義でも聞かせていただきましたしようかね」とまるでまた小娘さながらのいたずらっぽい笑顔を振り撒いて、そそくさと階下へ降りて行った。

「じゃあ、一杯だけ」というお内儀さんの一杯は結局十杯だった。それもぼくならぬ、

お内儀のいにしえのロマンスを延々二時間に
も涉って雄弁に語り聞かせたのち、やっとぼ
くを解放してくれたのだった。お内儀のかつ
ての恋人は特攻隊員だった。彼は南洋の島か
ら飛び立って、ついに帰らぬ人となったのだ
が、お内儀は出撃していく恋人を追いかけて
單身種子島まで最期の別れに赴いたのだった。
そのくせお内儀は言うのだった。
「まったく近頃の若い娘ったらまるで節度
がないんだから。うちの娘もこんな時間にな
ってもまだ帰らないのよ。わたしたちの若い
時分にはとても考えられないことだわ。こん
な時間にでも帰ってきてごらん。それこそ往
復びんたを食らったものよ。あらあら、もう
こんな時間だわ。あのこいったいどこをほっ
つき歩いているのかしらね、電話ひとつ入れ
ないで。これだからしようがないわねえ、ま
ったく・・・。じゃあわたしはこれで。ごゆ
っくりおやすみなさいませ」

お内儀は床をのべてくれるとそそくさと出

ていった。あたりがしーんと静かになった。
再び独りを取り戻すと、ぼくは今日あったこ
とを振り返りなんでもなかったようなことに
妙にこだわってみたり、それを何度も何度も
捏ね回しては反芻するのだった。なぜあのと
き彼女はあんなことを口にしたのだろうかと
か、あのときのぼくの言葉、あれを彼女はど
う受け止め、どう解釈したのだろうか、あの
とき彼女の見たあの表情、あれは彼女の心
の内の真の顯れだったのだろうか、といった
具合に。

そんな逡巡を何度も繰り返した挙げ句、や
っとぼくは眠りにつけるのだった。

その夜ぼくは脈絡のない、いくつもの断片
的な夢を見た。その切れ端の一つはこんなも
のだ。ぼくの記憶するかぎりでは、かつて見
たことも会ったこともない男・・・彼はぼく
よりかなり年配であるらしかったが・・・に
向かってぼくは何やら話しかけていた。どう
やら夢の中でぼくの知人か上司であるらしか

った。何かの拍子に唐突にぼくが「人間て結局のところ氣の変わりやすい、氣紛れな動物なんですネ」と言ったのをよく憶えている。未知の人は瞬間、まるでぼくが何のことを言っているのやら分からないといったふうの様子を匂わせた。それは彼の中で、最初は不可解な情念であつたものがしだいにぼくへの不信の念に移行していったらしかつた。やがてぼくは男の視線の中に、ぼくに対するあからさまな非難の色を見てとつた。その目は恰もこう語っているかのようだつた。

『そんなふうに邪推する者は、世界でおまえただひとりだ！』

ぼくはひどく罪惡感を覺えた。が、かと言つて彼の方が正しいと思つた訳でもないのだが・・・。それから先は像が消失した。それで夢が終つたのか、それともつづいていたのか、曖昧でよく憶えていない。氣がついた、約束の朝を迎えていた。

海は荒れていた。波が生き物のよえに身をうねらせながらぼくたちに押し寄せてきた。波間には点々と大きな岩が頭をのぞかせていたが、その岩肌を打つ波の碎け散る音は、格闘を思わせるほど荒々しかった。波が岩をまると呑み込んだかと思うと次の瞬間にはもう突き破られて、ガラスの破片のような白い飛沫が宙を踊って飛び散った。空はまるで鉛色の天井に一面を覆われたように暗かった。泣き叫ぶかもめの群が、すぐ目の前をまるでぼくたちの存在など意に介する様子もなく大胆に流れていった。羽ばたきを停め、吸い込まれるように海面へ墜ちていく。それはすごい加速度だった。と、思う間もなく波頭直前で再び巧みに羽ばたいて、身を大空へと上昇させていった。

しばらくの間ぼくとゆきこはそんなかもめの舞に見とれていた。

「わたしね、笑わないでちょうだいね。一生に一度でいいから『かもめ』の舞台に立ちたいの。ニーナがわたしの夢なの」

「あんなに悲惨になってもかい？」

「ええ、悲惨だからこそやってみたいの。最後にニーナが以前の恋人に向かつて、しかも今は捨てられてしまった愛人のことをこう言うでしょう。『……わたし、あの人が好き。前よりももっと愛しているくらい』って。わたし、この一言を言うためにニーナは生きてきたのだと思うの。それがニーナの生きていく証だったんだと思うわ」

「でも、その一言が以前の恋人を自殺に追いやる引き金になったんじゃないのかい。つまり、銃口はこめかみにあてられていた。ところが彼はそれを引くことができないでいた。そこへニーナが現れてあとはきみの言った通りさ」

「そうね、わたしのはやっぱり女の子の他愛ない憧れにすぎないかもしれないね」

浜には中学生くらいの女の子が四、五人遊びにきていて、ビーチ・ボールを蹴っていた。彼女たちは何かゲームでもやっているらしく寄り集まって何やら密談でもするように三言言い交わすとまた散って行ってボールを蹴りはじめた。それを見たゆきこは靴を脱ぎ捨て裸足で彼女たちの方へ駆けていった。風が強く吹くので、その度に後ろから見ると彼女の長い髪は瞬間マフラーのようにうなじに絡みついてはまたほつれた。スカートが彼女の腰のあたりから腓にかけて執拗にまといついた。風は彼女の体の線を衣服の上にくっきりと描いて見せた。そのときぼくは体の芯から熱いものがこみあげてきたのを覚えた。遊び興じる彼女に風はときどきいたずらも仕掛けた。その度に彼女はきやつ、と言って両手でスカートの裾をつまんですばやくしゃがみ込んだ。その仕草が可愛くもあり、美しかった。裸足で走り回っている彼女たちのあげる水しぶきが健康そうに撥ねていた。やが

てゆきこはぼくにも来いというふう到手招き
してみせた。それからぼくも仲間に入った。

「ねえ、踊りに行きましようよ。わたし踊
りたくなっちゃった」

札幌に着くなりゆきこはそう言ってぼくを
誘った。ぼくは少し躊躇した。

「いや、踊れないんだ」とぼく。

「だいじょうぶ。わたしについて踊ったよ
うなふりをしていればそれでいいのよ。何も
きまりなんかありやしないんだから」と彼女。

「で、何踊るの？」

「もちろんロックンロールよ」

彼女の挙げた手に、すぐそこまで来ていた
流しのタクシーが、急ブレーキのけたたまし
い音ともにぼくたちの横で止まった。

「運転手さん、南五条までやってちょうだ
い。近くて悪いけど」と彼女は運転手が訊ね
る先に行き先を告げた。運転手は大儀そうな
素振りを見せなかった。

「構いませんよ、どこでも」
風貌からして、むしろいつもより愛想が
いのではないかと思えた。
「おつりはいいからおじさん妥妥といて」
彼女はポイと五百円札を投げ渡した。
「どうも」と運転手は頭を下げながら彼女
に目配せめいた笑みを送った。
八時を少し回っていた。フロアーの上では
すでに幾組かの男女の群が肩をすり寄せて踊
っていた。ぼくとゆきこはカウンターに行っ
て、ウイスキーをストレートで注文した。喉
の餓えを癒すために飲み干す一杯の酒が生き
返るほどにおいしかった。熱いものが喉から
胸元へ下っていく感覚、瞬間かっとな燃え上が
り、それからゆっくり拡がっていく体内の火
照り。
ブルースの演奏が終わって、スポット・ラ
イトの照明が急に目まぐるしく回りはじめ、
原色の光線が四方八方へ飛び散った。ロック
ンロールの激しいリズムがそれに合わせるよ

うに場内いっぱいにこだました。

「さあ、今度はわたしたちの出番よ。行つて踊りまよう」

彼女はぼくの腕をとりフロアーへ引っ張つていった。群が殺到して入り乱れた。もうぼくなどお構いなしだった。彼女は踊りまくった。つられてぼくも踊った。わけもなく、こうして体を動かしていることがたまらなく心地よいことに思われだした。衝動的だったからだ。意識がすうっと上の方へ解放されていくようだった。ときどき彼女の方をちらっと見遣る。ぼくの視線を拾うと彼女はただ笑つて頷き返す。ぼく自身が宙に浮きだした。ぼくは何も思わない、語らない。ただ訳もなくぼくたちは笑っていた。するとそれが連鎖してまた次の笑いが無性にこみあげてくるのだった。彼女は白い歯を輝かせてぼくを誘う。ぼくはお互い何かやけになっっているのではないかと疑った。なぜかやるせなくなってきた。彼女の顔がゆがんで見える。もはやその顔は

笑ってなんかいない。くちやくちやになって
いる。地響きを立てて大地が振動している。
ぼくはもうくたくただ。頭の芯が麻痺したよ
うだ。彼女は顔中汗で光らせている。ゆきこ
は顔にまといついた髪を勢いよく掻き上げた。
「さあ、少し休みましょう」
「あなた、なぜ結婚しないの？」
「やめよう、今はそんな話しは。機会に恵
まれなかっただけのことさ」
「嘘おっしゃい。じゃあチャンスさえあれ
ばしてたと言うの？」
「そうだね、そうせざるを得なかったかも
しれないね。そりや理想はしないことだとは
思うけどね」
「それじゃあ、まるで彼といっしょじゃな
い」
「えっ？！」
「いえね、彼もよくそんなことを言ってた
っけ。子供をつくるのが怖いって」
「ああ、ゆうべ話した彼のことか」

「でもあなたはきっとすぐに結婚しちゃうわね。わたしそんな気がするわ」

「決めつけちゃうんだな」

「いけない？」

「いや、いいさ。勝手だから。彼のこと今でも考えるかい？」

「忘れちゃったわ」

「少なくとも今は・・・だろう？」

「うん、永久に」

「どうして？」

「彼にはもういい人がいるもの。わかるのよ。わたしにはわかるのよ！女の勘よ。まちがいないわ」

そのとき一人の女性客が入ってきた。彼女は今にもよろけて倒れそうなほどおぼつかない足取りで歩いてくる。年の頃は二十五、六かとも思えたが、それよりずっと老けて見えた。いきなり酒を注文しては一息でそれを飲み干すのだった。それがかなりの回数にのぼった。見知りでもあるのかバーテンも何も言

わず、乞われるがままに応じていた。バーテンと何くれとなく話していたが、女が何気なくこう呟くのが耳に入ったとき、思わずぼくは身震いした。・・人間て、いったい何のために生きているのかしらね。・・。

渋谷から東横線で毎日毎日同じ景色を眺めながら通勤していたとき、そいつはぼくを襲った。さびしい暮れ方だった。いつになく乗客も少なかった。立って吊革に掴まっている人間は数えるくらいだった。人いきれに不快な思いをせず帰ることのできる数少ない日のひとつだった。ぼくはいつも空いているときそうするように、自動ドアの窓ガラスに凭れて流れる家並みや暮れなずむ遠景を見送っていた。電車は高架を走るので、いやでもぼくの視界は拡がる。やがてすべての風景が茫漠とした気配に包まれた。そのとき、ぼくは急に取り留めもなく。・・俺はいつたい今こんなところで何をしているんだろう。・・という不条理な観念に取り憑かれた。そしてそ

れは周りのあらゆる人間にも及んでいった。
・ ・ ・ きみたちはこんなところで一人ぼつね
んとただ黙り込んで腰掛けていたい何をし
てるんだ。何もこの俺が今ここでこうしてい
なければならぬという理由はどこにもない。
なんなら俺は今すぐ電車から飛び降りること
もできるし、次の駅で降りてどこか知らない
ところへでもふらっと蒸発することだってで
きる。何々をし、何々をしないという必然性
などどこにもありはしないじゃないか・ ・ ・
と。

しかし、ぼくは電車から飛び降りもしなけ
れば、蒸発することもなく、やはりいつもの
日と変わることなく、同じ駅で降りて同じ道
を歩いて同じ家に帰った。しかし、ぼくの内
で何かが起きたことには変わりなかった。
忘れかけていたそいつとまた肚突き合わせ
る羽目になった。それも行き場をなくした女
の仕方なしの一言で。

「あの人すごいわねえ。さっきからもう五

六杯立てつづけよ。きっといろいろ抱えて
るのよねえ。・・」
ぼくはゆきこの中へ逃げなければ、と考え
た。女のけだるい表情の中にも凜とした美し
さがあるように思われた。これから先の人生
を彼女はもう拒みもしなければ、のぞみもし
ないだろう。そんな諦観的な凜々しさとも思
えた。その顔からつと笑みが零れつづけてい
る。それがぼくなどよりはるか遠いところか
ら送られてきたように感じた。ぼくは上滑り
している自分を感じていた。ゆきこも快活さ
を失いつつあるように見えた。こういうとき
ゆきこの心は揺れているのだろうと思った。
波間に浮かぶ雲の反映のように・・。
「わたしって多情な女なのかしら。節度が
ないっていうのかな。わたし、ものごとをあ
まり深く考えないで行動するでしょう。こん
なことを言ってもいいのかしらとか、こんなこ
とを言ったらどう思われるかしらとか考えてる
ひまがないのよ。でもわたし自分じゃ多情で

浮気な女だなんて思っていないわ。でも、ああいう女の人見てたら、わたし自分がわからなくなってきた。そりゃわたし軽薄な女かしれなくってよ。でも、わたし・・ねえわかってちょうだい。ほんとうにわたしそんなに多情な女なんかじゃなくってよ。ねえ、あなたならわかってくれるでしょう。ただわたし、あの人のように深く思いつめれないのよ。根がお天気屋なの、それに気紛れ・・。自分でよくわかってるつもりよ。ほんとうは楽しい気分にしてもらえて、浮かれているときが一番なの。わたしっていつもいい気分でいたいのに――

「わかるよ。とてもよくわかるよ。だからゆきこそんな顔するなよ。人が変に思うじゃないか、急におかしくなったりしちゃ。きみはいろんなものを愛することができ。でもいろんなものに目移りがして色気を出すような女じゃないよ。むしろきみはもっと自分を大切に扱うべきだよ。きみっていう人は、目

の前の新奇なものにはあまりにも無防備に自分を投げ出しすぎてしまっただから。それに比べぼくの方はまったく逆に臆病で、多情と
きみがいうならばくなどはもっとそうさ。き
みはぼくに下心があるなんてことは思っても
みたこともないだろうけど・・。さあ、も
う一汗流そうか。ぼくは今夜踊って踊って、
そして疲れて疲れて疲れまくってしまいたい
んだ」

それからぼくたちはまた踊り狂う雑踏の中
へと紛れ込んでいった。ぼくは朝までゆきこ
と二人踊り明かそうと思った。なぜなら、さ
つきぼくは踊っていたとき、熱気の中で何度
か隣の見知らぬ女の濡れた肌に触れたのだっ
た。その触覚、そのときぼくは昼間小樽の浜
でゆきこに覚えたのと同じあの熱いものを体
の底に痛いほど感じた。ぼくは自分がゆきこ
の何を求めているのかを知った。

店を出たのはもう五時前だった。雨上がり

の舗道からは、朝靄が立ちのぼっていてあたりはしんと静まり返っていた。人気はなく、街全体がまだ深い眠りの底に沈んでいた。ぼくとゆきこは車道の真ん中で手をつなぎ、合わせた手をそのまま大きく振りながら歩いた。ちょうど病み上がり人間が、雨上がりのすがすがしい朝に散歩に下り立ち、久しぶりに踏みしめる大地に感じる命の証にも似たものがあつた。

「わたしね、前からこうして誰もいない車道を誰かと大手を振って歩いてみたかったの。とてもいい気持ちだわ。友達が聞いたらみんなびっくりしてしまおうね、朝まで踊って飲んでたなんて聞いたら・・・」

「眠くはないの？」

「ううん、ぜんぜん。あなたの方は？」

「同じく、ちっとも」

ぼくたちは彼女の好きな流行歌を軽く口ずさみながら朝靄の中をどこまでも歩いて行つた。

「今日はこれからどうするの？」とぼくは彼女に訊いた。

「これから一度家に帰ってまたすぐ局へ出るわ。あなたは？」

「ぼくもこれから一仕事しなくちゃならない。技術の人と旭川まで行くんだ。まっ、車の中でしつかり眠らせてもらうよ」

「がんばりましょうね、おたがい。あっ、タクシーがきたわ。悪いけどわたしお先に失礼させてもらうわ」

「今度はいつ逢える？」

「そうですね。・・局の方へでもいらしてちょうだい」

「さよなら、気をつけて」とぼくが言うと、彼女は動き出した車の窓越しに笑顔の顔をくつつけながら手を振った。

それからのは長々と語る必要がない。

なぜなら明くる日彼女はもう局を辞めていたし、またぼくの仕事の方もさして手こずるというほどのこともなく終わりそうだった。高圧碍子がリークしていた。これは、ぼくの会社が開発した専用レンズで覗けばすぐわかる。送電線が電波を遮蔽している要因もあつたがこちらはアンテナ位置の調整で解決するだろう。あとは業者に任せておけばよい。さしずめコンサルタントであるぼくの会社の仕事は終わったことになる。あとは提出する報告書の整理ぐらいのことだ。ぼくはいっしょに仕事をして仲良くなりかけた局員にゆきこのことを思い切って訊ねてみた。

「それは多分アルバイトの子じゃないかと思えますね。短期契約でたくさん雇っていますから。ちょっと待ってて下さいよ。たしか名簿があるはずだから見せてあげますよ」

しばらくして彼はその名簿を片手に帰ってきた。

「総務課のやつちよいと変な顔してましたけど。強引に持ってきちゃいましたよ。この中から搜してみてください」と言ってぼくに名簿を手渡した。

ぼくはその中から揺・季・子という文字を指で丹念に追った。

「いやあ、さすがに東京の方は手が早いですなあ。へとっさにぼくは顔が赤くなっているのを自分でも感じていた。あっはっはっは。じゃあわたしはあちらにいますから、ごらんになったらまた持ってきて下さい」

「ぼくは名簿に載っていた彼女の住所を頼りに家の近くにまで行ってみた。多分ここだろうと思われる家の前まで立ちながら中へ入る勇氣は出なかった。

ぼくは宿の殺風景な部屋で一人ぽつねんと何もしないでいることのほかすることがなくなかった。ぼくはたまらなく苛々とし出した。毎日々方になると決まってぼくは彼女と出会った例の通りをほつつき歩いた。すべてが色

褪せて映った。あの日あれほど甘美な感傷を
湛えた外界すら今は忌まわしいものに思えて
きた。多分会えまいと自分に言い聞かせなが
ら、それでも心の底では淡い希望を抱いてい
た。ぼくは、同じところを何度も何度も行っ
たり来たりした挙げ句、歩き疲れてしまい、期
待がまたしても徒労に終始したことを思い知
らされる羽目になった。

『やはりもとのままの自分に逆戻りだ。い
つも結果は決まってこうなのだ』そんなこと
を一人ごちながら、ぼくは宿への道を引き返
した。そうして諦観的な気分に浸ってしま
うと、逆に外界さえそれに呼応してぼくをやさ
しく包み込んでいるように思えてくるのだっ
た。ぼくの気持ちには満たされてはいなかつた
が、満たされないことに却って慰めを覚える
ようになった。

夜、彼女と行ったレストランで一人食事を
してみた。そこにゆきこがいるはずはなかつ
た。マダムに彼女が最近来ないかと訊ねてみ

た。客の応対に忙しいのか、それとも、マダムにしてみれば、恐らくままごとほどにしか映らない他人の情事などいっこう関心がないのか、彼女は突っ慳貪にこう言った。

「あの子はよくいろんな男の人と出歩くのよ。あの子にはそれだけのことで、そこらへんの意味を男の人たちは変に誤解するのね。

あの子にそんな気はないものだから、いつもごたごたしたもめ事ばかりこしらえてはわたしのところへ持ってくるのよ。あの子のすることには深い意味はないのよ。あの子に恋愛なんかわかるはずもないわ。あなたもあの子なんかに深入りしない方がよろしいんじゃないか。あなたは内地の方なのだし、いずれ帰るんでしよう。どうせあなたも遠くへ来て、気晴らしのつもりであの子のお相手を勤めたのでしょうけど・・・。そうね、まったくあの子は遊ぶには都合のいい娘だものね。男好きのする顔でもあるし・・・。あら、わたしったらよけいなおしゃべりまでしてしまったよ

うね。何か気に障ったのならごめんなさい。
わたし正直に言っておいてあげておいた方が却つ
ていいと思ったから言ったまでですから」
マダムは客の方へ水の入ったトレイを運ん
で行った。ぼくが食事もせず店を出ようとす
ると、遠くから彼女は・・・あの子は最近ず
っとここへは来ませんわ・・・と、他の客に
も聞き取れるくらい大きな声でそう言った。
それから何か急に思いついたとでもいったよ
うにぼくのところまで駆け寄ると・・・それ
に、あの子はもうこの札幌にはいないかもし
れませんわ・・・と、囁くように付け加えた。
マダムの言葉で、ぼくは彼女の中でどんな
存在だったのか、との想念が鎌首を擡げ、ぼ
くを悩ましつづけた。ぼくもまたマダムの言
うように他の男たち同様彼女の中で十把一絡
げにされる存在でしかなかったのか。いやい
や、決してそんなはずはない。あれらのこと
がみんな嘘のはずは・・・。仮にそれがあ
り得ることだとしても・・・それでも彼女は誠

実なのだ。

そこでぼくはこの疑念を封じ込めてしまうためにこんなふうに転化する・・だが、どうして俺はこうも愚劣なのか。彼女とのことが真実であつたことはこの俺が一番よく承知している。なのに、事態が少々変化し、時間の中で記憶が薄れてしまい、そこへ持ってきて他人の一突きが軽くあつたくらいでもう虚偽としてこうもたやすく葬り去ることができるとは・・。

ぼくは昨夜寢床の中で読んでいた『バルムの僧院』の次の一説をまるで継り付くような思いで反芻していた。『おれ自身にたいしてなんとという失敬な態度だ！おれがこの決心をしたときより、今日のほうがもっと賢いと、どうして考えたりできるのか？』

いよいよ明日は帰らなければならぬといふ日になつてしまつた。ぼくはまた例の通りに出かけた。ちやうどゆきこもこんなふうで

彼の帰るのを待っていたのかもしれないと考
えていた。陽が翳ってきた。退け時だったの
で通りは車で溢れるほどだった。クラクショ
ンの止み間がなかった。空気はそれらの上げ
る排煙に領され、頭上にはそれを吹き払うそ
よとの風もなかった。先日ゆきこが現れたと
同じ路地を二つの影が飛び出した。連れの一
人がゆきこであることを確認するにそう手
間取らなかった。瞬間、心臓が止まったかと
思ったほど胸が締め付けられた。足が金縛り
にあい、ぼくはしばらくその場を動けなかつ
た。次に事態を悟ると、逆にぼくの心はひる
んでしまった。この場から逃げ出してしま
い、たくなった。あれほどあてのない希望を抱
いて捜しあぐねていたというのに、ゆきこを目
前にしても喜びは込み上げなかった。ここで
こうして何事も起こさず引き返し、ゆきこと
の邂逅を秘めたまま別れていくことにひどく
惨めさを覚え、またそれは卑怯なことのよう
にも思えた。

彼らはぼくの方へは足を向けずに反対側へと折れた。ゆきこはぼくから離れていこうとしていた。ぼくは足早に彼らを追いかけた。途中からは駆け出した。やっと追いついた。彼らはぼくの前五メートルほどのところで信号を待っていた。この信号が赤から青に変わり、彼らはまた歩き出そうとするところだった。このタイミングを捉えてぼくはゆきこの後ろ姿目がけ、今まったく偶然に見かけたのだというふうに声をかけた。

「北村さんじゃないか！」

声にゆきこが振り向いた。一瞬彼女は驚いて狼狽してしまっただけに見えた。ぼくが彼女のことを北村と、ぼくが知り得ないはずの姓で呼んだことに驚いたのか、それとも単にぼくに驚いたのかそれかわからない。ぼくももう自分を演じることができなくなっていた。ぼくの表情はぎこちない不自然なものに見えたのにちがいない。すると、そのとき、ぼくとゆきこのほんの僅かな空間が、気まずい中

にも、一週間ほど前の出会いの日のように短く緊張した。

彼女は連れの男に何やら二言、三言言い置くと、ぼくの方へ走り寄ってきた。

「あの日別れてから彼が突然家へきたの。どうにもならない事情があって遅れたらしいの。やっぱりあの人はあなたの言うように約束をたがえるような人じゃなかったわ。それでわたしたちよく話し合ったの。二人とも泣いたわ。わたしたち結婚することにしたの。これから二人で東京に行って、いっしょにお芝居の勉強しながら働くことにしたの。あなたとのことは、わたしどんな些細なことでも一生忘れないわ。ほんとうよ」

彼女はまばたきもせずにじっとぼくの目を見ていた。その数秒間がぼくには無限に長く感じられた。

「じゃこれでね。彼待ってるから。また東京で会えるかもしれないわね」

ゆきこは怪訝そうにこちらを窺っている男

のもとへ小走りに駆けて行った。ぼくにはとうとう一言もしゃべらせずに・・・。
男にゆきこは何やら言ったようだった。男は、ぼくの方を見遣ると軽く会釈した。律儀そうなの、明るい目許の青年だった。
西の空が火事と見紛うほど赤く燃え上がった。そいつが過ぎるとあたりは夕闇だ。

8

夜汽車は遠くまばらな家明かりを闇に流して行く。明日の朝まだき函館に着き、それから青森まで連絡船に乗り、青森から上野行の『はつかり四号』に乗る。そうすれば夜までには中野のアパートに帰れる。
長万部から行商風のおばさんが乗り込んできてぼくの隣に腰を下ろした。室蘭からの帰りだと言った。冷凍みかんを取り出して、ぼくにも食べろと言ってすすめた。それから訊問がはじまった。どこへ行きなさるか。仕事

は何をしてるか。年は？結婚はしてるか？郷里はどこか？等々・・・。ぼくの一通りの説明で納得すると、今度は自分のことを、いつもおばさんの胸の中に引っかかっていると思われることを語りはじめた。

「いや、わたしにもちょうどあんたくらいの息子がいたんだけどねえ。人間の運命ってわからないものだねえ。もう死んじまったけど、そりゃほんともうあっけなかったよ。」

おばさんは急にしんみりと話しはじめるのだった。こうなると無関心な態度も取れないので、一応驚きと同情のふうを装った。おばさんはつづけた。

「それが、亡くなる日の朝、あれがわたしに電話をかけてよこしたんだよ。ついで手紙はおろか電話だってかけてくれたことのない子だのにね。それが急に朝電話をかけてよこすもの。こりやてつきり何かあったなって思ってた急き込んだのも無理ないさね。ところがあの子ときたら何か事件があったというわけ

でもないし、これといった用事もないんだね。
じゃいったいぜんたい何だってまた電話なん
かする気になったんだってわたしが訊くと、
いや、何、ちよつとかあさんの声が聞きたく
なっただけさなんて笑い飛ばす始末さ。変な
子だよ、まったくおまえは・・なんて言っ
て、おたがい笑って電話を切ったんだよ。じ
ゃあ、かあさん元気でね。おまえもだよって
わたしが言って、それが最期だったよ。わた
しや、今でもあれの言葉が耳元にこびりつい
て離れないんだよ。それから一時間もたたな
いうちにあの子は死んじまったんだよ。オ―
トバイに乗ってダンプに衝突しちまってね。
即死だったそうだよ。わたしや不思議でなら
ないんだよ。どうして、あの日にかぎって急
にわたしに電話する気なんか起こしたんだろ
うかってね。あれがあの子の運命だったなん
てわたしにやとても信じられないよ。わたし
に電話したばかりに死んだような気さえす
るよ。それでも五分くらいは話したのかね。

電話さえしなかったら、それともわたしがどこかに出かけてでもいれば、あの子も五分は早く出勤してたにちがないさね。あの子、言ったもの。じゃあ、かあさん、これで切るよな。もう時間がないんだ！遅刻しちまうよって。それで、きつと急いだんだと思うね、あの子は・・」

そこまで言い終わると、おばさんはふうつと一つ、肩で大きく溜息をついた。それからはずっと黙り込んでめったに話しかけてこなくなつた。

そうだ、思い出した。あれは十八の春だった。就職で郷里の駅をあとにするとき、友達がたくさん見送りに出てくれた。出発前の喧噪を横に母は後方の柱近くで笑いながらぼくが友達の一人一人と握手していく光景を見つめていた。やがて列車が動き出し、友人たちのあげる万歳という大きな声が夜のホームに響き渡る。最期にぼくの目は母を探している。

列車が速度を増すのと同じほど速く、母の顔が笑顔からみるみる涙顔に変わっていくのが見えた。こらえようとする母の顔がゆがんで見えた。

長いこと母にも会っていなかった。ぼくだって手紙はおろか、電話だってかけたことがなかった。東京へ着いたら手紙でも書こうかとも思ったが、ぼくの隣で、今は心地よさそうに眠っているおばさんを見てやめることにした。書いておきたいことは山ほどあるような気がしたが、結局のところそれは、母を訳のわからないことで困らすことにしかならなかった。

その晩、ぼくは会社を辞める決意を固めていた。

「札幌でいったい何があったんだ」

「いえ、何もありません」

「じゃあいったいどうしたと言うんだね。」

急に辞めたいなんて。うちの会社がいやにな

ったのかね？」

「いえ、そういうわけじゃありません」

そんな社長とのやりとりを頭の中に思い浮かべながら・・・。

（了）

（註）作中の引用文は次によりました。

ヴェルレーヌ・堀内大学訳「無言の恋歌」

チェーホフ・神西清訳「かもめ」

スタンダール・生島遼一訳「バルムの僧院」